千種日記　巻之弐

和書門
類
二六〇三〇號
六九函
一三架
一二冊

内閣文庫
和書
類
二六〇三〇號
一二冊
一七七函
二一架

内閣文庫
番號 和 26030
冊數 12 （ 2 ）
函號 177 1149

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak
C Y M
colorchecker
x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

中務り紀　二

千種日記巻第二目録

洛陽留止記
東山辺見物の事
因幡堂入の事
小山辺見物の事
西山辺見物の事

日本政府図書
書籍館印
浅草文庫
和學講談所

千種日記巻第二

浴湯留止記　三月廿七日より四月二日にいたり

東山花見遊事

三月廿七日天晴日数経し旅のさゆけさもなくなりぬ休みて

かぜおもしろくあそびに出てなかなか遠くして東山の花は名物也

なふかすのわざしきてしとみえしかしこき人も

まうしこゆきくみだやすいつきお添ほどにけ

しめ春の名物也今までしなりあはれいのちをさるべう

このことあるによつてぞ名をひろしやうてくなんにて
はしくしるあつかりけり堀川より二条殿へ出て東を
ゆきれまく鴨河のかたはらに出るなかれすぎされたるなり
くり逍遥せしところのまつ松ひ出らしぞたゞ此水の
やまに都の中世河ハそのの小川をとふあつ水をば出と
つまあり賀茂の川中より西をめぐりてひろしにすれ
みなしし川あたりの川すぢをひろく三条四条のひがしは
ありく四河をたび五条七条九條を経て東ふなびきと

竹田村のはしとすさらく名ねをなかれかくつて川とあひ
くさかね川ともいふ也いにしへは此川を二てよりあふをとぞ
わかり六条七条を経て御所へおもしく京ちうをめぐ
船とりちを今はいつもりて中さくれなみをとおなじこの川
ぞよあり殊多し　新古今　鴨長明
石川やせみの小川の清けれバ月もながれをたづねてぞすむ
川ぞひにひがしはりくせうごめんのかつらぬすこまり
四条の川中よりまつりだけ此所より天神地祇をまつりて

あるなりし王城の鎮護神なり延喜式霹靂神祭三座
と見えたる是なりむかし日乃神あまの岩戸にこもらせたまひ
八百万の神たち神楽を奏し給ひその時天降りましこの
ところとなりまうとなむこの世の今にいたりて此所を神
楽岡といふ又此所より斎場所大元宮日降坂諸澤など
ならびに卜部氏の秘してあがめしゆへありとなん新
續古今正三位兼熈
よ渡つよ代をやわ久れ越寂しくや吉田の神もあはれとはみよ

祭主吉田侍従兼連は唐崎の神乃宮にたつ今の世
迄ことく神事を行ひとゝせまつり國々より神主ともと更
新よの神つとしと給ふみ祝おさまるくれゆうしと為まり
又位階に叙る事も吉田より奏せられ給ひて宣下
有ちさしく神つとまり田の郡とのこらず前栽原
殿本の流明をこさなさせまふて今の兼連いとぞあなた
しゆしく吉田惟見といひし人すこ三平の秘旧重乃
奥まつく為しく見ゆくえすゐくせまふ萬連成章

のかうり惟足師の命を請ありてこの道を傳へ給
らんとせしに家居ふかくして惟足か傳へし所をみれ
神道みちにあらすとてきんこのまゝ惟足ふ
かく此事となけきて深く嘉連の師となり我光君
相林公此所をこのまゝ語ひてよろこくふ惟足とめて
その法師まうまひしかが折ふし嵯峨にあとかくにて
於ひ出来り事多し吉田のきつふ白河にいふと
ちかく忠貞公の山庄の道なりとそ白河の法皇とす

まつ住ひてのち御構ありしを久しく田のはしさ
なかうさしき京の寺町より知恩寺とうちより嵯峨る
と百万遍とをいふなりさかり松なといへる所とこの
わうらいをさかひてならひあひて神楽岡より南の
山陰を経て黒谷よ出んとすその道ひくさかしうす
さうしきこちや庭をすきまてうちやすきほかりのころむ
ときに松の木のまにかのたて笹そむらいそつし形せを
しとめ折すかりしきにたとへらく松しけしとなるをいは

ちらふげんをみてさはつきたんかてすみぞめらゆく
まうでいのりかくのごとくなれやかなしくとひく
くろ谷におはしける法然上人のすゝけるかすり紫雲
山金戒光明寺といふあるのま人に紫雲たなびきこの
かゝりに源空いかうをむすびくすゝけるによめる歌に
紫にたなびくらんむらさきをいは紫雲のいろまさるらむ
熊谷次郎直実大夫敦盛のためにそのあとをとふらひ家
然谷堂ともいふ蓮生法師が住けるとかや

あとありくとも編ふさらに入道して山をのかりて禅閣
寺ありける時は足利義政公の住たまひし所也此人は世の
中つりことをとゞめ給ひて此所にすみ給ひたまひて
うきを世をのがれてましますのうちくひがし山とのとまぞ
のおあとのふたの寺なり禅閣ちの寺をしてが谷といふ
俊寛僧都山荘よ住して成親康頼なとくはかりて平家を
ほろぼさんとせしがあらはれて流罪につれられ
けれを也しが谷の南に光雲寺ある東福門院の仕

叡岳とそれ其の上の山を無動寺といふ。このわうらう
近江へ出るみちなり。これなん志かれ山こえなり。う紙面と
やくりんあるところに御しよとはうまりくかくもむところ
也。むかしやくりんといふ人志ふ住て塩身の時ちとこの
あふ安置しつねに住仏偈御たしにあるなにうち
由ゑにこたへにけ御じしるとくへりみて妙なり此上
給ひとこさせきにやくりん夢覚て此事あり給ひと
こゝろよきかりいてありかくしとうてあそばしてまいりてねが
ふくハ末世の衆生をまさかがませらくまつくへしとのまゝみ
くつせすひとれちしませうしといのりまりくいま
いまうくれがしのこゝろくしふかせ給ふなんそれもうして
みくりの師とよりあへいとあ本しやうそうのおけぬる
にくやうまん又はやくりんとうゝやとこのむ人ふく
本尊の仏のけらしとえそうしろへ縁ぢゆがめうす也あるん
それすひあちらんもいとせんうすしな紙るく南禅寺ちふ行
おまへの門へ向ふれをとゆきしきゝこのうすんすりいう也

さく人めして火せんにけさせまいらする人〻申とふ
京よりあまたひとしかしる人なまておとはく念
地なんよりとほく人けむりのかゝりかさくゆるみみとえあけ
てこほくそひさく法のいてさひさんれとあかすと
らもろなりしの桃園の御門なりけりにまり荒して高
すゝましうかうなすけ大たけとは東山なりくよりう遠や
なんとちえまれぬやてひさしうひさしろひくあそ
てへぬ北なる五山のそのひとつなく大伽藍ありこより

あらくらかりし出白河のちしあらてまう南山かく
知恩院てゆるおちて源空の弟子とるなり世人
たしくのちひえの山に定照とて法師と源空弟子勢観
源空を中あらゝぬく三年の庵法けるをしまうく源空の
生統とあしらくそてんさやしに二寺ひそうに源空の死
がらを嫌らすし生骨とひろひく遺徴の二尊院てか
られぬけるがおんとなくあめんとおうてて生骨と大
堀川へなうしくとのゝけまくまぬき塔生骨は

桂川の堰にかゝりしを桂の里人とりあげておさめおきたりしを
今は下鳥羽の光明寺といふなり知恩院より山路をゆけば
丸山にいたる此寺の内に小鍛冶水とて清水わき出る
むかし宗近といふもの太刀をうちて常へあらひけるとぞ
を此丸山に大僧正慈円の御はかあり此ちる
人をとふめくらしとする所丸山ひかしとかく世ふるそ
其を見とて出るとて紋菊にわたる祇園の社
におもむいて立石の鳥居の前に入れは神院と申は此社神は

素戔嗚尊なり貞観十一年尾張国津嶋より此所へうつし
奉る山城国愛宕郡八坂の神社といふこれなり後朱雀
院の御とき五年に二十二社の奉幣社と定められし
又此御社をひとつにせしめる小吉田祇園北野は延喜式に
のらざれば式内の神にあらざるなりしかるに六月七日此御社の
まつりとて長刀ほこ鞠ほこ月ほこ舟鉾をはじめて
鉾七つ山十八とわたしくらべ日の暮方に社より
神輿を四条寺町の御旅所へうつし奉る四条河原に

急ぎしとぞいふまゝ供奉の人々或ハ衣冠を着或ハ甲
冑弓箭を帯しつゝすべて同十四日神輿御旅入せしよ
りも大概七日の祭礼まではしく山ぼこおほくわたりおこなはれ
ありけるひたすら大祭なりけるぞ此御祭ハよのつねならず
多し東遊ひの舞あそび
神代の八坂の御ことよりぞいはれもかぞへつくしがた
みこのみこと是よりまめり後拾遺集御歌
ちはやぶるかみのそのなる姫小松よろづ世ふべきはじめなりけり

玉葉集神祇の部に
わが中のみやの桜花さかりひさしく人の身をはぐくむなむ
此ところぎをんの神のよませ給ふとなん又此神を牛頭
天王と申奉るといへりそさのおのみことにおはしますなればいへば
なりけれ中ごろ此小東南を祇園林とて松さかりなりしに
ともすれば牛頭より西の御門を出て四条の河原を
わたりなば経みなもとに建仁寺にいたりけるを五山の
そのひとつなりけれはわれこのたびれたる清く

まつれせきなしといへり。ちゆうさくさはめうのりをも
はかりかたき人々のせのひろくはかりに立まん本のけぢ
なくぬみしことわりをなみきのあつかとうきさらくひろく
はつかのうちにこゝろをくためらりむりしのちにとありひあ
くけんかたきなりあくまりあらしにえらく　みぎわかんま
切ところたえぬめやに此地獄あらくきめとまうしふへき
おもにいのちいふほりすへしとれあり　ゆかりあ也たゑ
のらとやいろくさはあらぬへきまべくしいとひあるまりたひ

ぬるふとくたし薬師ぞすゝみふとかとより身の体ぞうし人々
をこ志月なる人の出るとそのとの五ふくらくおん主
さかひところんのやまひのいゆかなりとくそこそとさし
志かしく薬師如来とふなり今その事とそうりてすゝ
風寒暑湿五身七情のやまひとよく薬師のまうし
まふさくかまのくわんとおこしてたのんにそのやま
ひのとこあり人あまいあせらくれしのちうくうと
よくみるく人ゆくまいしてせんなきことを

まことにこの目度の地龍とぞ申しつたへし
地龍の二字は地にくだるといふ事あり乾の卦の初九にいはく
いはく潜龍勿用といふあひだ此ゆへにいかなる人の心かは
この御天子の御陵なりとぞいつもの山門をひらきあがめ
まつりけるとやあつまりしぎおんにはまつりをあめのした
たらちなる筆もて傳へてともに人もひとりふたつ
やきおんどうふとくる名のみなく傳ふ古人もそこはけ
出世すとぞいふなり筆やのりあるまでこれといふわらは

御きくらすこらにもえとどかつぎとしふやく清げ
いとらうたしげなりいはむかたつぎ給ひてすゑに
ならひあまいはばめんかき御仰のりゆんなるの雲つまびく
とりわきもあるをばいつもえんじなるは古んさうこともかりて五は
うちみるうちすらひぞけつうはさまなどいふあり
この女らわらひてそでで御身んもあるかとあひ
きやこづきたりとふらうとるあれてもかさなり
下河原と号して八坂よりの此所に五ちうの塔を聖徳

太子の建立なり国家の変あらんときは此塔
かたぶきしめしけるとぞむかし浄蔵貴所といふ人
この塔のかたぶきたるをいのりてもとのごとくなほしけり
となりにありける高台寺よりいろかんと入て左の方
円徳院とかやいふ寺の庭乃けしきハ東山にならびなき
名木にて枝ぶり東西へ十七八間にひろがり花のさかり
にハ雪の山かとあやまたれみる人たちどまりけり
花ハちりてもそのにほひのこゝにみゆるまで西湖無窮

庭苑とうち通りてすぐなる道の南に霊山といふ
あるを霊鷲山にかたどりて鷲の尾の[illegible]といへり
いにしへのこぢよりか夜花の人とどめてあそびけり
ちる世間へ入よりゆかしげの匂ひみちきて俳初まとめて
ぐされ者はいかすりし丸山長楽の名をつまれさらんと
きひし山乃いかつくさにてつとひうんまてくれあし
とうちほにえまもぬ山ちと出て南かけ不そうしれ
ばる坂ありて三年坂といふ大同二年清水寺をたてし

らせ又のみこし此坂をひきのほりしによりてかゝる名に付る
とぞ又或説には産寧坂といふちかきころ女の此坂にてこ
ろびぬれば三とせがうちに死すといふ事ありとかや
大同三年の開にあらずと死せりとくなん名付なり
道の坂なりとあるひはむかしよりいひつたへしといへり
て今まていさゝのひとんもあらず此坂をのぼりて
ひがし人はかならず経書堂をたづねて車やどり
といふ者も太子子安の塔は泰産寺に馬とゞめまた清
清水寺の門に入たるきしとあまのかはらといふとぞ
自分のぞいはれは此寺は田村丸延鎮姫の恵
居士云法の像をおさめけるなり地蔵のやしろにゆき
大きに観音堂に祈るものも多しその毎に水をくみて
へとかうの聖の頭といふ大人のたゞあるべし也
石のきしとかの廊下とつらねて本堂にいたる也
のぼりて見わたせばさらのみ迄ゆく舞台風
みあげてのぼりて見るに是ほど高き所ありし

けせうの杜工部が一行ん花を飛職布春をさしへうおよあえ岩ひ
出るおやふなりの神ともかさむしあしてみけるの
らへの山と音羽山といふ古今紀友則
音羽山けさこえくれはほとゝきす梢はるかに今そなくなる
此より地主の比中ろよ御しつゑのさためしとの
つとし比中ろハ南むき也此神ハわか此山の地主な
ろうと坂上の田村丸この鎮守とあかめしく後比中ろ
走清しゝかとろへく清水のさとろとなりしり弟さ

あくまて京家をうしろにおりやとうらていへりたちひ
なりへし瓔珞の花はさうりにて幕うちまはして
やんことなき人にかはりなつてけふこゝゆうにもあそひ
うれとよみてあんさくすゝ花のえにまつけてかへ
はしそれをみてくつれ琴のいとはけうかれあそせ
流つよ中の根ふしらし河つくまとこものやう乃
松の色さへあきかしひさうかわらふ十月みえけりなる
女乃うちしく

君櫃にたえたみさ川なかれてしくゆくかたなかりし
あさゐ茶をとゞけてゆきごにはてしく露かゝりて
まことふかきおもかげいまなほしるしとやすゝ
まかりけるとかたしなすくやとらくまさるゝ地主より
おくのゐんまいるはしにて千手観音の像を安置す
いにしへ行叡居士といふ人のすみけるふる跡なり堂の
かたはらより七条河原にいでたるこのゐんとな堂のうひ
たより菓へるのきはたちしと紅葉よりて音羽の

なきみかめこのきざらし七十二まきあさのくわ
不動のゆきまて其のたかふるのかけひこうすむ
あさきそのかけひよりおつるこゝのたかふるをこみ
な緑のたつふと紫をくたちみかしそり新後
樅有家のことなる
名にきこえけるたゞりとおもへとまたれのこゝ神はぬすておもひ
ゆくひとのやまもなきけるのはるまもととく
のこれくまた名よる人とおもひくひとの山あさきとよ

めくらしたまひしのはしの麓(ふもと)は帝陵(ていりやう)にてけりなる
ほとりあまたの寺の庵に花あつく清閑寺(せいかんじ)といふ所へむかし
しばしのまに車をやりしとおもひあへくゆきてみ
ちやとおもふほどにはやとのみなく人めかれしさ
やまみちに出るにさしすんしの中山也けさ宮とおく
はなにきこしさ小みやこのうちなとうらさびけ
さかもとまたりとおもふ花紅山あくるけ入て清閑
ちかふ入この寺は佐伯公行といふ人上奏して草建(さうけん)し

けるとぞ。なかごろに藤原相の封(ふう)まで千年の後をあ
らし寺の中に高倉院(たかくらのゐん)の陵(みささぎ)なり此御門(ごもん)ひとへに
おはしましける御代くらしし平家(へいけ)のおのおのをりて小督(こがう)の局(つぼね)
のなきあとはわたりましが今をある人ともしらずて
としのむかしは此帝の御五百回(ゑかい)すりきて此わたりのあたり
はるけかりそうてとしてさるのはしの麓(ふ)に
むかし兼好(けんかう)法師のすみける庵の跡なりとなん
出る水を兼好水といふなる此ゆえにわれもさくさくひ

ことく寛喜源月すらといひし女ありて人のいふりにく
ゆかひしが今はこま給ひとやぶれ申しとなりてむかしなれ
なじみもみてゐなりしやとあはれに見ゆるしや
あみてなげきすぐてまい困りしきれとなふくある事ありて
人めとたゆきさるまさよふんもいかでうすと聞ゆるいかにし人はちゝ
因幡堂の西の坊といひしはしのそこかひ不成く
此人はいかがいてとありてしよぬ中よかりつひとりすきと
京よりみやこともてきてくけなからやりし志うしみやこ

のぼりともすゝめひ給ひさいげんしよこうりくをまうひ
ほうちしけるがおとゝしのあき向井氏の子此京より
あづまへくたり給ひしにあひくそりしそのことをきつすや
とゝくなんくるましにそのやうしのたちいくゝうるうひ
てえらす御しさらくきてとかくありいけれはちゝ小いかなる
人をすむなやいかんとおもひめくらしてうちゆるんと
するに罪あまりなる法師のちまよう出して我みさうさき
よりゆるくともちるかせにいやしのこゝろやいすれはちゝに

ある人とはしとねかはしけるものゝみなくさめに
めるましへんとくつやをりふしこの人あゆみよりて
いはるゝりとくかへらむくの門まで入まゐらせて言
食此かんのはなちは今すぎさまに何まで遠くすゝめて
いふその時しもうちゝりとみしやうなるぞふていはりける
出すはしりは往よりは京まのかり待るが弥さてきたるて
まゐんとくなんとりへてつるぬめるがみてをりひ
いつらと蓑さくえ久へうな繊なのはしのうれにとみはて

あやしく御尓（まし）なれどかしいまぞとくれめしのゝなり
はくやおりしますらくな紙をきつさんすどめぬなく
ちからしあゆもよりぬはほしほとくとみてくなり
ちくこいいふしくうたはくとの風りまふやいつの
よう京へは往さまみかなふくく京のるとしとひ
侍るねやとくわがあくとうくあうとまふまうら
うすきぬはうちすくさてしとくいそく暁の日くれて
東よ行き侍りゝ東山のむとをふみあすのしちと

みすかはされてけさきより出てゐてありき
しに吉祥のゆきのしつくにむかひし見しに見えて
ゆくもたどりたどりしてはるかし世ながらしてうらみつゝ
ゆくまゝにけへ給ふとふまづうつらへとしてひとゝせし
ならひ人へくわがうりするはしますいりかみ人
ともみなせて我このをもすなり給ふとふみれと
あられなりけるほとにありけるにあかしさまむとゆ京
みとせりしをとめゆかしうきねて京の所へこ

急ぎ給ふんなとちかうりて出る尓暮にしてやかうらん
かしゆさしく花さしと見したにかうきまゐり
こゝの中山にゆりくるまゐる人ところとよみ松の木陰
またひかしけさ京よりいかにの紙の端により給
をさけるおもてさけるかごかくやとしたちのほかに
わかやかなる出たる女のさまのいとつやかなるにありさと
おりくるしはしけらす菊の山はいかゞとぞおもふ
松おほくしげりあひ山のけしきのかすかにしてまさりけるの

これ又建武のみだれに四国の侍どもとく岸に
のぼりてうたしけるに武蔵がまねきけり　紀
家あり
松浦とは昔八幡太郎とかいつるが弓すぐれて
やさしき心あり風まで続きも本意の花ちりさ
つきにけむとおもひつゝ忍ぶる心すゝみて
勇しく何のうしろをもくるしき人の本意なり
とてとくぞうつりて心やさしやとなんかりて

おくより若狭殿ゑちゞ京より大津へうつるとき
なる代みにかりくたの家のうしろに佐渡太郎のつ
けんしゆの主への心なくかたしとふかき仰よりつ
せきあひまた忠信をしたまひてはかるしく義輝の法
をしまつり給はずしの山をとのまじはりがたくせ
しとぶんにしまゆき南におもく大仏まいりてこの
御かた御かき中十六丈まへに御堂ひとしきわかせ
の儀とあん堵と大郷の南と二十二石常々ひと此年寄

白河院の御建立にて徳長寿院平愈となん名付させ給ふ
それは二千餘躰の千手の像を刻みて安置ありし也
平忠盛朝臣そのことを沙汰しけるとかや そのゝちまた
後白河院の御願にて千躰の千手の像なりしに二十八
部衆をさへくはへさせ給ひて蓮華王院と改め名
つけさせ奉る今ハおなじく三千餘躰の尊像は堂に
ありあまれり 長さは南へ六十六間五百とぞきこえ いひ
にしへ祇園の来迎があらはれしとおなじことゝぞ

矢を射給ひしがそのゝちはたえてさし矢を射る事
よりことひさしく今の世までたえず 年ごとの
卯月の頃よりさつきの中旬まで国々よりあつまれ
人ゝ弓の勝負をあらそひしなり また いかに
尾張の星野氏といへる人は弓とりなりしの比
よりしほ出けるに大御の特様ありて門を出しける
なる事やうやうむかしいひ出して茶園の枝乃
ことふりけれは門さしこもりて人のかよふことも絶ぬ

ところどころまよなかさき日にやうしあまたありさね
ゆかしさかくまたうりしにみるやとらしにしま
ゆかしく鴨河をわたりて東山科ちまあらこれを
八大仏ふもとをまねびしめしてなの法ならくしは寛永年
八まのころ年なるじめのきりて延宝年中にあそびおりね
あるとしするて西洞院ながらで五条の天神よ陶
ほこの法師が右衛門のみなもと年ごとの節分の夜は
人だかりこの社より法どりひるまでたきやきものから

とけらとふゆをころ也むかし京北野の子道全
はしのあめに殊なむよう律居よるひるとなく
法師ありとなどこのみて訶を読しのひく松泉
或夕にあひて法もあて陶りきて殊まみ陶どろく
あるふれたる所とくかくはくみねけりと此法師たて
やとふびにしにゝの翁の下に親は五條西洞院に
どて殊くまじこのなり道全の殊を法神に
陶りて聞のまにまに吉ひいけがまにまにとなりて

神となりし御さま新其のひさしとうつしひきうつく
きて伊香ちかくいづみとりあつくさせけりところんこれ
は此神なり日之れあぢひやる伊香
廿八日天晴てあい志ら人野わたくひめありてすゝかへかぐらふ
いとゆかしかなり数の入てゆかし出てひとし
山の花とすみや今さらしならくの折り後ひく
ほりさるも本すゝむといとこし見しつあつめすみん
り花いさらかに乃こみるねきとこれをこれさ文

おもしろや花の風ちらんあるるをとなきにめぐりけるれど
みやこめぐり
因幡堂(いなばだう)に行(ゆく)事
廿九日天晴て浅(あさ)瀬の小路をいふところにゆかり此人の
やし邸ゆふにおかくいのりしきつくゆかりそとふ
らかまいてこし清もししとをすむらしの筆ども
まうでけくあみてあまりに志らつきぐらなりそ
おい人のくせ染けるおもしろし清閑寺にみをく

あひし夢人のちしよ行篤松京無なりなりけ法
師とさけり筆有く也りよ為にてゆきはひぬるさ
称くすぐちぶりくつまし かむりしのことろ
うしりあとく雨とふり也めりふぬきしな紙ちるよ
御門よりくみまそれ花くらく花のうみりまち
ちりげかを白ひくうとも紙ら神の然そあしりやあり
むちかりよ物さたちきしき同善りひし法師この
ちふ徳く けりりしらゆきうくふてるでうしきとわが

このくにとろよふふさらく徳すとつひしむと
おもひてらうよいとしのひるくてまうし やま
らふよ庭の竹ちあと包本もぬくくらうすしるとと
けりくひのめやとはえれなり讃岐あそしのきけり
なり弁とむりしよきはりて花てしはの花くく
のみなうらけりくむくはひしらふとんあとや
みやとよしなりきすきみも世 為まるはひし法し
おりらんちく雨ハるまてらかちく出く やちしあり

此のかけ石はむかし中納言行平のすミ給へる家
跡なりけり行平ひとゝせ因幡の守へゆきすみしとき
うみのなりとふ哥しき光のみえしにあるとむか
しく引あげまする薪御の縁をはなうつしてあし
とみ給ひし名ところにすまへて我家のなげかれ
身をせられけるに平のさかれ平にも給ひし須磨ふ
此所をあふのすし其の縁とはあつれにおきあて因幡
在原の卿の門をむかしはありすのさんとくつ経

関なくはなかりしか今はあさてくえのはしとけるにんに松原
と承つて人出つるよりも新里山は住あるへく命のりたく人路
ゆあれはとみちのくあらかゆるもはなてりの中あるみよ
よくきのよろ目つましく人ましくなひぬ我所より
さくのるふいてとおもしとおもすよいかくにかくそ
ぞしるさをみちとしのぞきまつりんと光徳はすり成
おもりまいけるに鳴まふく世ひ野はゆりこてしいは
ゆきへのゆくとしとうくして　むさしを　わすくは比須

さのみふかくも見えて志ら人のりよ人みちの程
ゆうつゞき雨かゝる梢の葉をはらひたるあさのち
のありさまもあはれなる事也見る人もなし
すみなれたるひとつ家すまゐなるかたはらにつ
ぬる也もとせしまりのあはれをかこちかねてとぞ
みちしるべみえし御しるしもとむる小庵の竹に
なさく雨やうく さるやうになるとも宮夢来田見えとも
ぢしるかしぬ

小山寺に見する事

晦日 天晴たるに小山の寺へ参る所に此よりすみやかにまゐる
千本通を上りに行く 二条の御城のかたはらをすぎて北野
に向ひて行けば中立売の東へ右近の馬場をすぎて
ゆふ方まで 伊勢物語にも見へたり乃日とはけふ此所なりや
秀吉公此わたりに聚楽をかまへしつひく 源氏の
あとをかくしてもみるにとかく行すぎて
御寺にまうづ 此御寺も 菅丞相なり 醍醐天皇の

れきき菅原の時平の讒言によりてながされさせ給へ
給ひしが罪なきよしと告文をまうしくてまさき
けれどもましまして昌泰二年二月廿五日太宰府へ
ながれさせ給ふ御延喜をつくとなりしく時平猶すく
らせ給ひみをのこりとやりくのけがさきへと
さはなしあらしふぶきふにはらしよりは雨まうて
しかくまうでもりひく王城鎮護の神とあらはれ
御世に御まさせたてひめの花とこのませ ますふるく

なんじやの世をゆくゆくづる人梅とうへてまつるみづ
がきの門をまもりあまのひめをたくし御とや儒家より
右近馬場にあがらせ給ひけれ北野の社をたてらしまつくと
きこしくその国の人きさらぬとれは此神すゑの鴻臚
館よりのりひくつくはらりのまみとなむ十一年の後
とき文のおほせじらく御らせのまぶ都給ひとま紫野
みかどの給ふよりく一時に十郎の得ぞるくまつら
しめのまよ文はらへさすへのまには勅をとおさせのふれそ

なくまの親王みな流されぬめされ君楓とふりくさぞめるよ
とよりまたかくしく宇多法皇へさゝげまいらせしとかや
一條院の御宇正一位左大臣を贈らせ給ひ勅使
下りしくへくだりて安楽寺にて詔書をよみあげし
天より声ありて
昨為北闕蒙悲士今作西都雪恥尸生恨死歓其我奈今須望足護皇基
御子あまたおはしましけるみな末孫までも栄えまつるとぞ

この御うたあまたよめる中にも続古今定家
ちはやぶる神のまへにて法わするなよかしこきあとをたれもわすれん
きよみづにもまゐりてよみ侍りける大僧正慈円
ためしあればねがひを述べて神つかしのいにしへの夢
御霊のひかり北門をおくりむかふに六角堂もとよりあれ
あらそふあとうなうちもゆかしみゆく
くみかは川のながれとふかくして平野の御神の語く
まつ森のくらき松はひとへにしるしこそあらはなり

此御神ハ天児屋根命也 延暦年中大和国春日山に
つまゐにうつしまゐらせつ そのゝち宝鏡のかゝり
詔ありて はやしろ乃事をさとされける也
又或説にいはく 仁徳天皇のみさゝきなり この事ハ
菅原家隆のかけり
難波にみやこありし葬まつりし宮居の跡を定めし宮
日本紀に仁徳天皇ハ難波の高津の宮にすまひし給く
御年八十七にてかくれさせ給ひ 百舌鳥耳原の陵に

葬りたてまつるとなり いつのころよりか此所に此神を勧請し
まつりしや 又の説には源氏平氏高階大江の祖神を
あつめまつるといへり 延喜式に野神社四座とのせられ
なりくりして神の御事はつまびらかならず
しや此社のまへより南へ道有て ゆかなるわたらひ
ゑしききる也 源家一流のなをとして天下関山流
のほしけるの何ひとさくとなりかさうるあり
あまり仏利あるよいへり 御室の此所こそといふ也 花山

法皇御幸をさへもおほくすこしもかゝらせ給はすとて
御門院の御為にはあるまじとかくて此庵さへ鏡し
きのまれひとし山より咲とそらくちりそめぬ
花ひらきく当いまちるとも見し東山の花のさかり
なひのこさとそのこしげさなよかてゝ由もひにき
いまちる事よさく紙の花の名所とみるともや
いとうましく花の君なりつゝ是まひるかゝるくる
よする木のもとげよ立よらんとしてさふらふへなし

維文字のみは二月盡なり春のわかれもおしむの名所ともなき
あはれなくなつかしき御かたみ行く申たり花見のたより
木引暁鐘雅春さうらはんしてそれのなかりしに
よひねの中をとりて由かりしげ出まへて東本のそれは
はかこのとく名所かくちらすをかふねとは花の
とくいかくぞやされをちるもぞしてそいかさらくとて
よろこびてあそぶらや宗祇七十九歳のたう
ひさりさんにゆる花なさきはふくゝ郁

とくるとはちるものなりうらことかやかれ又
なかひ久しくありてはるのなかりせはとうら
みあへくゝふ花なきさ人のあたりにやとをかり
京よりきたる人のゆへく此花を京へ申けるを
いつまの世よりかし中宮とふまでとなん思ひけり
ゆるねば此花は神代より生けるとや大山祇のむ
すめの名より桜のなにあらはせまふとして木花開
耶姫是なり皇代に及はゞ履中天皇御在位

池にて御遊ありしとき桜の花のちりくはさかつき
にうかみしと常にかれ給ひて内裏と桜の名を
なつけまいらせしと平城天皇の御製に
昔在幽巖下光華照四方忽逢攀折客含笑
亘三陽送氣時多少壷陰枝短長如何此一物
擅美九春場
嵯峨の天皇弘仁三年二月神泉苑へ行幸ましまして桜花を御覧
ありて詩を作らせ給ふこれ花の宴のはじめなり

文徳天皇仁寿元年後の良房の亭に行幸ありて桜花
を御覧じ詩宴の御遊びあり此亭を百花亭と名づけ
宇多天皇寛平年十七日より神泉苑にて行幸ありて叡覧
ありて花宴を催し給ひて詩を作らしめ給ふ其
そのかみ世々の御門まで花宴をもよほさせ給ひけるとかや
むかしもろこしにて牡丹を花の王なりといひしを
の桜をば賞せざりしや何らん詩人の歌詠もあらへば
みえず于武陵が白桜桃の詩に

記得花開雪満枝和風和蝶帯花移只今花落遊
蜂去空作主人惆悵詩
王安石が山桜の詩に
山櫻抱石蔭松枝比餘花發最遲頼有春風
嫌寂寞吹香渡水報人知
此二詩をみるにわが国の花とはなりもろこしの桜桃は
さらに何もずとみえたり又本草をみるに桜桃の名の
そらくにはのはやき實のなるる皆はやらのごとし

かゝる明の林堯俊が多識論にと楓槐の部にてかし
されいかのくかと見へてめくらやさげなとある
を見て作るかしいへつかにとききろうかしあり足利
氏天下を一統してのちかゝるの紅葉といゝあつまり
まして六十様とけ代和ちふまでになむ面まで河あり
山ときらひのとろとみあくとすきて東にゆく廣
沢の池乃南まで行日の名所なり新古載類政の
ことなり

いにしへの人のみさいかゝ歌詠く月のこするの廣沢の池
嵯峨の西かくもやまうらひに詠めるは此ふいかなく
かちまうる人あらしとよりか仰なふおもの秋なるべく
なかしもふとうてあはれなりきあんしとせうく
ひがしの方のとにか等持院といふちるに足利
尊氏より十三代の将軍のみぞうありなを小方の
くやうのかゝるに鹿苑ある足利義満公のすて
給ひしところなり義満公義詮のいゆつりとけ

まさりしく都のうちにすみ給ひしその所を室町
殿ともいひ又花の御所ともいふ其花の御所は御子
義持公にゆづり給ひてこのところにうつらしめて北山殿
とぞ申しけりその楼閣このところを精舎とさ
だめしにより世の人金閣となづけしとなむ
応永十五年此殿の人は薨去ありし同年の
五月義満公うせ給ひしに太上天皇の尊號を贈
られけるとかやいまあさましきことゞもなりいまは

ありて三階の金閣をつくりなし其の二階には
まいらせ三階には天上より極楽をうつし給ふ金
をあらはせんくしやうり閣の額は究竟頂とありて後小松院の
御せいなりとかや閣より南に池ありて其の中に芦原
蓬莱といふ島ありそのほか安民沢龍門瀑夜泊石巌下水
銀河泉みな金閣のほとりにありけるのなりの山を
衣笠山といふ往古今の名あり
古歌にも衣笠とぞ詠じけるはかりつつその雨の衣また

此寺は后の光孝天皇ぬかきと悲しまさんと勅をたまへて
しけるに其のまゝ建立ありて廣苑と號く
蓮台野をすぎ舟岡山とのそむなる人をたちうち
てさかつとなりける北の塚のもとにくれ行さくみ
ゆゝしあはれなり西行法師の歌に
舟岡のすその野の塚の数そへて昔の人に君をなしつる
このうたハいとかなしうあはれなり平治の軍に
後源義朝のちゝ為義此山にてうしなはれ

けるとなりとかの霊ありしと時は古今弘法大師
九年の間時の帝にゆづりけるとかや此寺の説とぞ
此所は元弘の年中首藤氏と河内の国楠と相戦ひ其の
後建武延元のころほひ軍ありけるところなり
の松ありしかど今は松も見えず其の所は
焔魔堂あり此あたりは小野篁の草建なり文永年中
如輪上人といふ人もみけちしてこの やよひの十日より
大念仏をはじめられしが今にいたりて毎年の念仏

とく〳〵のはつかりくわしくなまり舟岡山の北
ひがしに雲林院あり此寺は淳和天皇の離宮なれ
御所なり白毫院といふところにてありちかしこれ
も又その跡の所なりそれ此ほとりに紫式部小野
篁のはかありといひきしがたね侍るとしか
へりし定家卿の時雨の亭式子内親王の墓あれ
白毫院のほとり小寺とたのむ又ある説に時雨の亭
は此の相国寺の内にありとぞいへりみな雲林院と

まてありくいとをすなりかやちなりけりあやしの
法しとかすく問ましこたへてそのかたりのさまれ
家は入くるの中ありきみな雲林院の所は大徳寺也
このかたはらもむかしはその跡なりとおしなへて小野寺
此ところ蓮台野紫竹などいひて七野の名なり
大徳寺に入くし山門の額を金毛閣とす寺ゞとにおひく
一休和尚のすみける寺は真珠庵といふちなを出て少し
行くだるに今宮へゆくつかるき山中しろい一條院

のはじめ疫神(ゑきじん)をまつりてあがめたてまつる後拾遺
京の長(なが)しのかみに
白河のとをみてくらべてぞよそにかへるらむ神の宮の
今よりはうらむる人は花の都にいかに定めむ
紫野北をさして村とすゝきはらさびしき所なり
此山のおくにいかやうなる所へゆく大徳寺へゆくなり
けりおりおりの月をたまへるやまをみなみにならびて
うしろにはいせきの大宮のはるかに雲林院の世に

のはじめは位にいたりまひてのち賀茂の北やしろへ
皇女(くわうぢよ)をまつらせ給ひておほくすまはせ給ひしとぞ
嵯峨(さが)天皇の御時有智(うち)内親王(ないしんわう)はじめていつきたまひける
二品(にほん)内親王は経史(けいし)に通じ文林にあそび給ひて
弘仁(こうにん)十四年の春嵯峨の天皇斎院に行幸ありて花の
えんありしとき文人春日の山荘の詩をたまはり
其韻(ゐん)を探りて有智内親王塘光行舎の字を探得(さぐりえ)
ひとはたちもののうちに詩を

寂々幽荘迷揄裏　仙與一降一池塘　樓林孤鳥
識春澤隠淵　寒花見日光泉　穀近穀新雷響
山色高晴舊雨行　從此更知恩顧渥　生涯何以答
雲蒼

みかどふかく叡感ありて二品をさづけ給ひ文人料を給
はせける也此ときの年十七才なりし給ひしの内親王
のおはせしは世をゆづり給ひて後いくほどなくてこそ御
門もおほく鶴とはくらせ給ひて御部屋にてかくしもならせ給ひ

恭以文章着國家　莫將榮樂負烟霞　郎令永
抱幽貞意　無事終須遣歳華

天長十年二品になしを給ひなりぬさせ給ひし給ひき
なほ貞潔のみさをかはらず内外のおこなひすぐれ給
ひし薬師寺ををめぐらせまつりしとは申すにおよばず
御葬送とよりひし給ひ葬の儀とぞうけ給はらざり
しとなりそのゝち世々の皇女はみな世をのがれ
太御門院元久元年二十四代の斎院にいたりて此

事なり千載集(せんざいしふ)の序に
ちはやふるいはかきのまへ乃榎(え)の木にかひをよせし柳(やなぎ)のかくり
新勅撰摂政太政大臣
春はなほ神まさかきのとはかなきこの門より夜果(ちやうくわ)まかり
式アのねりまもりきくれの文比事となりしくゐ
山の寺とこそいへて雲林院となりしへいゆや賀茂(かも)
川とワたりて賀茂の清中なかしくまする名と
のしかるしと少よ新く淀和よ到るそのおひさ
その志で原は続(けいで)るとのうとふたり此御神と
別雷(わけいかつち)の神也むかし人のむすめ鴨(かも)河(がは)にて
あらひしけるに鴨の羽(え)をはきたる矢(や)ひろひてかへす
ましまうりしを女とりてさくさてわか家のかきにさしたり
きしてをきけりそのゝち此女はらむことありて
男子をうめりそのむすめのおやそのこちかひしくを
うみけどもおやはしらずといへはしみてみてたくいかにや
とくそのこに盃ふたをしこゝろさす人にとらせよ

このちにさうつきことりぬせく なんち文のたまふ
さしをけとぞしへしるに子は人の申をうけを
ぎゝのきふ させる矢のしとにかくわぬ文母
はと人みれ初らうまく その矢をよせく はちごの
うち鴨氏とまうけしぞうん 賀茂の祭は四月
中の酉の日なり 葵の日 勅使かまく 御門より
むましてゐく たうぞをまゑまつりの日に 御幸となる
かめのとをれるづくと云る 延此年に 欽明天皇の時

ときよりはじめり 競馬のおこりは五月五日也
又延喜のまつりは十月下の酉の日なり 宇多
天皇いまだ御子にて おはしける時 賀茂
のほとりに鷹狩に出給ひしに 俄にて曇りて
きりふり 東西に迷ひ給ひしに 明神あらはれ
よがられけり 後ふかく うれしきをおほせさせ給へり
猶のおほせられけるは 此わうよ すむ人なり
此賀茂の神まつりは すゞしくまつり給へりしと

冬のまつりと申たれうしとは御子はおはしまし
賀茂の明神あらはれさせたまひてまつりせさせ給へ
我ちからあれはおよひかし内まゐらせ給へかしと
の給へを君のちからのおよひさふらふへきことかは
申べきなりそのときにてこそしらしめしたれはひ
給ひて此年をすきすまゐらせていつしかと
すくらせぬみこふりに御申させ給ふ
いまさいくさくなりにけり仁和三年八月廿六日春宮

みせさせ給ひてやかてその日位につかせ給ひぬ
そののち此神の託宣のまゝにとて寛
平元年十一月廿一日初めて臨時の祭とりおこな
はせ給ひて左近衛中将藤原時平を勅使にせらる
れけるとそ又このまつりの宗と此宗へのさまかはらす延
暦三年六月紀伊守を勅使としてそのことを申さそ
あらせ給ひけるへて代々の御門ことさらにあかめ
まゐらせしるしなりとありおもきなし古今敏行

ちはやぶる賀茂の社のひめ小松よろづ代ふとも色はかはらじ

今案に武子内親王

さかきばはたゞのひらぎ神まつりくしくぬるとのみかきさ

本社と申すは此所にあらず 一言主の神と末社に祝ひ来

まへなる鴨氏久の家なり

君が代はいのりそめにし此よの神也まつりかゝさん

いにしへの中ころよりは在原の業平 朝臣世尊寺

和尚のかしこさ

月を見て夜を徹し いにしへの事をおもひ出ではなげき

或経に此中に住みたる事のありしをいひて又はかり

まうでとかやいふところ也 むかしより式アの家に申して

けるとか

そのとき御神楽は常のことなり 其乃ち川へに参りて

此社より霊楽とふところに出る舞台にかはりて新

道をいひてひとせ奉るとす 其のちにはる

舞楽を催して まゐらせ ひとしからぬいまいその花ぞさかし

たゞうすずいろうつくしく夕陽の田面にうつりてやけらのこ
なり日暮て京に帰る

西山所々に遊ぶ事

四月朔日天晴わたりければ愛宕に詣んとて粮の
まうけしてより二條を西に京をゆきてすれくら
はるかにみる西の山々のけしきいと面白く
ときさりなくみたなるつきにしとうてさすらへあ分
のころまで夜深きてふ山のすがめといひてはやすり
それのみこゝろに参てみゆれば其の南は小塩山と
いふ其の山のふもとにすなはち大原野也此西のふもと
名をしらぬをはじめとして大江山などいふなるゆう
こゆるみやこの山のつゞきは山崎なり京より七
八町南にあたりて築地のごとく流れあげたる土手まで
作りしけるは土手は京の四方をめぐりて東は十町
のなかばひろくしたしこ今にのこれり南は六丁
七条のあたりより北は今出河の北より舟岡山の南に

はるハ円覚寺より東南にあたる そのかみ秀吉公のさが
きのまつしろなり 今こゆる大手の門を最初河原といふ
なきうしを経るをなす千本也 山のうちなどハ里とす
さくらを植ゑるゆへ 此里のうち 秦始皇帝をあがむ
し祖ハ応神天皇の十五年わたりしより 秦氏の
人あまたくらしめてあらハする事をおほく事と
なしけるに天皇これを愛し給ひて山城国葛野
郡太秦の里を此人にたまひける 其のゆへをさると

のことのうちにて目を驚かしたまへれ
事也 渦のことしとく此ところを内さとあがめ
たり世そのうち此人その始祖なるによりて始皇
の廟を建てまつりて世ゆへに故に推古天皇十
一年十二月厩戸太子秦の川勝にたまはせてこのところに
太子随身の阿弥陀仏をあまたしてその川勝が氏寺
としての太秦の仏になづけられていまその仏像は
このところにあつまり広隆寺のほとりに安置せし文は

ものゝあるハ菓撫仁なりむかしこにくまのおかふ
山るのちかれ夕暮さうくみまれハ入けひの篇よ花ぞちつけり
世ゝとよりかくして入あひの日ののこしとしも世
なほかくなりしなにハ法論あへりなにけなく
ごくかなりかうひの神あんどのえしとすゞしく嵯峨
のきよふ入あるひの人まうまてくこの時ハもと世
のさかせよられんつひしく行しませ給へといふ
そ申のこやましくその燭を洗ましく屋漏も恥

とりやいふよ世間の毀誉をおもくとかくすと菩るとも
い衆歌よりめぐみりかくれ世事よるをまてあふ
いの人乃いそく世俗をひ日の清さとやが剃こし
栴檀なりそうしくその卯月八日に行をおし給ふく
為偏を拭ふまてこれと世の人けるのしめの御身都と
て衛くゞらかる人多しあさきこの御の灌仏あり
たふ申いふと行也りしなくふのかり人齋戒を
ろそうなりとされハさらはちけるらされんみされ

国立公文書館 National Archives of Japan

ほどのよりきたりて　その家挙(あけ)て記し置て
縁(えん)ふかき人をもひろく意をとめ才徳(さいとく)なる人を
言葉のかはり祈(いのり)かなへ人に非理(ひり)をもつて理をしるその
ほどのかげを持てふまへ訴さへ像なりといふ今さ
このよふ悪論(あくろん)にかゝりこのむところにかなひてもとをとがむ
人いかにいはんほとけをまつりさだめてとふらはん
とふすゑ禍(わざはひ)けさまり身のつはにいでてしまへ
しらとげてあれどもよもしつゝめがたくみちもがう

かへりもまうさの才徳(さいとく)なくて言葉のかぎんには
友とむすびしまうのゝなすその禄(ろく)をぬすむへ
又非理をもつて理とせうとして天理とかはりて
身をおろそかにせんやおもてきつく富貴(ふうき)貧賤(ひんせん)死生(ししやう)は
天命のきはまる所なれば佛をたのむへきことあらを
紙ふくへより媚(こび)と人に求(もとめ)て香のなきことあへら
らぬ家まよりこの手はう世家はつきとれよりかはき
のあつとかくて　みそれ共　一ふくとひきそして

身まかりにまぎしたふ名かりしはさらうとあれは
てその志しさとりとんせて佛のちからを傳へ
むしくうすず家ところさゝすらん今家久しく
ようひて君は法りまつふちから申へき天命
すこんはへて祿を百ずしけり又命はゆくたえ
やまひを弟し法へて常は下神地祇まいのりまう
此んいさくう身のとみを祿をはゆくす家先君より
このことまたとらう事ありとて露の徳をうけ給ふとし

不幸みしく此やまひは死せんその恩を報しく
ものとのまをたらしくうし此家ふこのつかひ若う
法て祕書をさゝけて精識をすまらし也今傳う
ぐまんはうこの此神へとこの事のことをやまん
とすうていうま又はえつらんもわかつらりしいさくとせ
法へとくて報世かつのはしのみんとおり此さふ神を
山ヒ神をもまもくこて多くし遍昭僧正さふ神をたとむ
うたらく

多にありて あつまりえらりて とまりへしみがたちはなれくふかきみね
なかれくたる清滝の山まのなかれ坂口(さかくち)よりのぼりてゆくに
石をたて紫にあり高ねの鳥居まで五十町ばかり也
ことしるしありて嵩に海へ一町ごとに石の
表(へう)を立て何町のほどといふことを志るせり山頂より
十町ありのぼりて茶屋よくてある清滝川の
ほとりより此坂を志るべこの清滝川のなかれさら
ありてさまよふ川は大堰(おほゐ)川(がは)の上なり古今(こきん)神(しん)
たい法しのうたなり
清滝の瀬々の白糸くりためて山わけ衣(ころも)おりてきましを
新古今　西行法師
ふりつみし高ねの深雪(みゆき)とけ(どけ)にけり清滝川の水の志らなみ
此河に添ふてつたへこうとをりて下に清滝といふところあり
みちけはしきのかりてくたれはあせの出ぬことはなし
ありしなかのかりて峰にみかたに山の国河内
国までもみゆる右の方に水尾(みづを)といふ所あり清和天

ゆるされぬとかり給ひてのちすませ給ひしかは
おはしてかくれさせ給ひけりとなりけるとまかり
山のまへに侍者御座あり高尾とよはれてみのをに
より今このわたりの人そこ川のかたへいふなり
高雄山にゆきもみぢの名所にてそこのあるを神
護ちよるふそのつきる栂尾槙尾といふ所と有まで
なほもどりて月の輪といふ山とみゆるちかき薬や
まさくその所といへるけふはけといふ葉やのかし

也てかららけそらくこととの音よなぐる風景
おけてひとおりし所衍の市とぞいぬきてあがりて
二三げんゆきて音にたちぬ人なきくとおりかくれ
とたちてて人をかへりてまぐらひぬ丹波国
亀山城にゆきやしくのほりて歳の名ありける
郡よりて愛宕山とを供理ののさまかくそ名あり
あすされ左右まちとあつまりれかれゆかりとうつ也
かくの葉やはて櫁のえてちうまさかげるなほ彼

すぐくいしのさはちらしとのはりくれ中しろふ
御子此社をいはひたてまつりしのみことなり又或説に敏達天皇
の御とき朝鮮国より日羅といふ人きたりて死せしを
此門にうつしまいらせ祝ひて其の神霊をしづめ奉り
ますといふりしさしとかの椿王八條の相国さまのかた
なきあとのこゝろのまよひなき為に年をふるまゝに
志つかに此社をかくれける此山のこゝろすでにとひしさりとて
つまく清盛は浄か新造のうちすくうたまひける志

多りあるやぶのうちに祇王寺ありてしのたに祇王
祇女が住かてきゑんしを此おもひハ平清盛公につか
まつりしが寵愛おとろへしのちはなにとなくこゝろに
まみしとありけるに佛御前といふもののちにおもひかね
てかなしともすさまじけれどもはかなくみえずかへり出家
かすみとおもし四人のこゝろのこゝろをひとしげにさとり
けりとをあはれとおもひたちてはかな嵯峨のの
たるを往生のぞみをとげたまふむかしおもはし乃

またて横笛といひし女の住みける所なり
さてより西に行く二尊院に至る門の前に小倉山
とて兼明親王のうせ給ふところなり 其のかくら
二尊院とて小野篁の作られし也 このあたりは法然上
のうくさせたまふところ 法然上人の再興なり
まけらるとそむかしは此ところより小倉の山までと
のうちにありしけるも此年の堂なりところに
定家卿の山荘の跡なり 定家おもふにまかせ給ひく

むかし西行法師の庵ありとこは草露の旁よりきて
う所のやまはあらしとぞ やまなり 貞信公の家に
とよめる山荘の紅葉なりといへり 小一条ひの紅葉あはれさるん
中書王兼明親王この所にすませ給ひしかば雨の降
けるに蓑かる人のありけるに山吹の花を一枝
折りて出させ給ふに心得ず帰りすすみける其人の
後より山吹の心得ざりしといひおこせたりけれ
はよみし

七重八重花はさけとも山吹のみのひとつだになきぞあやしき
むかしいかなる世にしきすさひことともはへらしまや
二条院より御使の文よりしらうゆかしより御門に
花みやこりくらまの香ぬしゆかしくてさとなれのこ
まりゆしやさきまの海きみとおもうけなれ
あしたとおほうさみてはつやてとはうくいて
ゑそそめなかりくらまの香ぬしとしさすぶふ
いとをかししふんてつされてうけりれみやの

まへのやぶのかたに清はひかりの跡(あと)まてあらくこゆる
はのしまいはせの斎宮(さいぐう)あそばしてきさへ皇女(くわうによ)まけ
此あまよろしきせまつらしとてなまむしさよまへ時に
極(うく)河みくなからせの花さらく御わうし大関(おほいら)人へと
詔ひ大極殿(だいごくでん)みしく御門みゆるし御わうしのはなさきしと
いそまりて詔しまふみやこと出させのすふる世源氏(…)
あまよ きさくしめゆるゆう
女のりれたまへのこあつききく志くてに 枝にはへ君なりとも

續古今　入道前太政大臣

梯させしつのをりのをりまな給ひけるに名乃白ゆき
又来女郎花御代にかくは給ひけるかな
とのねまつねの松風かはしいまきのてらにも神かん
こゝろ有まじく天狗ちかふかけるは開山夢窓
国師のすゝめにより後醍醐天皇のはかいのあとに
尊氏公の建立しはじめて暦応五年にとしたまひて
康永四年のことなりけるなのまくらは細さなれ

又く芹河といふ嵯峨にて御しめくは芹河へ行幸
ありしは桓武ありそのゝち仁明文徳清和陽成四代
の御門に至るまでいくたびとなく行幸とぞめでたき光
孝天皇の御時にこゝに行幸ありしに在原行平卿
あふしきことよしみてなくさみけるとぞいづとなくあと
ありけることゝもまたちよのみちをいふ所ともいはれて
そのあとこそ後撰集の歌に
さかのやまみゆきたえにし芹河のちよのふるみちあとはありけり

このあたりより南にゆきて大堰川の頭より出る一町ばかり
川上にむかへば小督の局のすみけるあとなりとて高倉の
みかどの御ために月あかき夜に仲国といふものをつかはし
きくかた近くめぐりしかば小督の局の琴
の音をきゝてめぐりあひしところなりとぞ
大納言経信卿此川に遊びてよみける
川すみ庵とむすびていにしへをしのびける
く煩悩即菩提生死即涅槃といふことを誦し

思ひけるとかやさても浄衣とかやいふもの着て
まうでかしこしひとりしのびてまかでゝ経文の
法をすゝむるや
なかなかに伺ひけるのうけ保の
やどのおもひきはしよりのはしとほしてこそ袖をひちて
思ひ出ても涙をながすのみならず
とかくつけるもしにていてありければこそなげける也
かくし山川のむかしを思ひいでゝおもしろく

はなのさかりに千本のさくらさきみだれける也又はむかし
つは代々の御門行幸ありて延喜嘉保寛治のころ
はじまりし前よりこれ迄のたびみゆきあり
いにしへ御くちずさみなんとよみつゝあそびし此所にて
のこしぞ大堰川のながれをひきて南よりて流
嵯峨にいたり此寺に屋形をうつして常の人より
大堰川とゆうな紙面にかく山のふもと里の内に
西行桜とて是をまへに世にいひつたへむかし

まことにけに花のちりけるありかたき
花みあそびもとめて人のくのさくらの木をわけて桜のころみえまたけれ
ある人のいふには此所より南のかたに嵯峨ぞ大堰あり
その庭にたてられしと西行さくらとぞいふとぞ申されたり
おぼつかなしひとゝせ亀山後嵯峨院のてらにさく
山のすゑのさくら家やたかきゆきてよむちん
とゝめられてやまひさしく入てもんゆきにて松尾山
此林の南の川此神は大己貴命なり延喜式に山城国葛

野槌 松尾神社は人これより一條院の御宇寛弘元年
十月十四日はじめて此社へ御幸ありて時源恵流ありて前に
ちかき所松の尾山のうけられいけるそちかきものならの蛙けり
今の人にも文この御事しられ参りとも人あまく作る
皇代南北よりの事を此事あれむりしたる大井河の辺を
つかふ時くりしが文徳天皇仁寿二年此神御門に
つけまいりて後に此事に作りしまゐらせたるの
なんとすらひ御神造じたてなむ代々の南を大原野と

よみ其の御事しらるるを天児屋根の命より三笠山より
また作りしまり仁寿元年二月より、うつしはじめて此
此社の事ふをとうとこなられけりとなん藤原氏の
后文はありけるがあしくみ作ひ二条の后この家に
御てく作ひしき藤原業平は御供につかふまつりしあり
大原野小塩の山と名づけ神代のことと作ひ出しめ
此社の人々と小塩山をうつし代々の南にひとゆかりなれど
京人日くれぬべしとゆかりまめにかきの わし

ふねまのり此門は大堰河のすゑなり水上は丹波の
国より出てとをる河とはいひ河さごの中を流て清
あさき河とはいひ嵯峨にては大堰河といふあるまゝにて
むめ法がれといひひろさの河のふかさよりうへさて
といひ鳥羽(とば)にてはなかれゆく鴨河とひとつにきうねかはと
いふなり又此河の郭(あか)にてあかみて武士のあつまる
かしこのあゆとかよりつ門の河すゑよりむめ法の
内に入出て大源頼基(よりもと)のかつらは此人は清和天皇(せいわてんわう)の

御孫にて貞純親王の御子なり六孫王とぞ申ける
源家の始祖として多田満仲(ただのまんぢう)の父なり又此西はむめづ
のりんしやのすゑ綴ひしめるなりとぞあるより
うす海さふ出て日られて末は帰(え)り古文道とのかゞ
桂として嵯峨まどりわたし御かとの前をいうじし
御かへさといふまでもすみ入ておぼろさくいかなる物
をかしきまゝや河のせとしやといふいゆゑも人の
ひろい御かこへるを御しるしとうきねてすまいぞ

たゞ紙の中しきさくとふ大学寺(ふくじ)の夜とみ藤(おし)さか
ゆきて見き おもしろくけふ見花(き)にみえしよしなれば今
をらひぬこれのうたと侍しぞさらめでゝ名残をあかで
きらくりしとさる侍ゞ袖を中のくらしみのこしける
とだ紙多かるべし
二日 雨ふりくらさで とくより 姉(あね)の山崎へゆきさき
のみはかたなごのおくらるゝしるく 擬更して帰る
三日 雨ふり ひるより 晴て のきの割(しく)をたつるまで
うちふきて たゞ紙なれめでくて けふあすは有馬(ありま)へ
あびを侍らんとて いとはかなし ゆふぐれにあ
ねのはりて ゆきて はつか月中に帰る(入)

国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan